

# 今日も島には 弥生の風が吹く

**吉** 岐における日本遺産の目玉といえ  
ば、長崎県で二番目に広い平野で  
ある深江田原<sup>ふかえただばら</sup>に広がる弥生時代の環濠集  
落跡「原の辻遺跡」。「魏志」倭人伝には  
三十一の国の名が記されているが、国の  
王都が特定されているのは国内で唯一、  
ここだけ。この場所こそ一支国の王都で  
あり、世界に開かれた対外交流の拠点  
だったのだ。

原の辻遺跡には建物ややぐら、門など  
が復元されていて、自由に見学するこ  
とができる。遺跡の中を歩いていると、ま  
さに二千年の時を超えて弥生の世界が目  
の前に現れたような錯覚を覚える。景観  
保持のためにこの辺り一帯は無電柱化さ  
れていることもあり、周囲には人工物が  
少なく、弥生の原風景を見るようだ。ま  
た日本的な竪穴住居や大陸の技術を取り  
入れて建てられた建物があるほか、収穫  
した米や麦を入れたと思われる穀倉<sup>こくそう</sup>には  
ねずみ返しが見られるなど、当時の暮ら  
しぶりが目に浮かぶ。

原の辻遺跡では日本最古の船着き場跡

をはじめ、いくつもの珍しいものが見つ  
かっている。その代表格が国内唯一の人  
面石<sup>ひとのおこし</sup>。祭器として使用されたと思われる  
人の顔をかたどった石は、まるでムンク  
の絵画「叫び」のようだが、その顔には  
うっすら眉毛があり、ユーモラスな印象  
も受ける。

また古いに使われていたと思われるト  
骨<sup>ほね</sup>と呼ばれるシカやイノシシの肩甲骨も  
発掘されていて、当時の人々は動物の骨  
を焼いて吉凶を占い、行事や収穫の時  
期、航海の日取りなどを決めていたと考  
えられている。

このほか同じく弥生時代の環濠集落跡  
「カラカミ遺跡」では、日本最古のイエ  
ネコの骨が見つかっている。弥生の人た  
ちは収穫した米をねずみから守るため、  
大陸から持ち込まれたであろうネコと暮  
らしを共にしていたのだろう。こうした  
数々の発見は、私たちが教科書で学んだ  
弥生人のイメージに新たな彩りを添えて  
くれる。

原の辻遺跡の発掘は現在も続けられて  
いるが、百ヘクタールにも及ぶ広大な範  
囲のため、これまで調査が行われている  
のは全体の十五パーセントほど。その大  
部分はベールに包まれている。もしかす  
ると、まだ見つからない王の墓な  
ど、思いもよらぬ宝物が発掘されるかも  
しれない。

祭祀で使われていた  
とされている人面石。



吉岐には真っ直ぐな木が少なく、  
建物は枝の分かれ目を上手に  
使って建てられた。米を守るための  
ねずみ返しもご覧の通り。

